

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	中瀬 浩一
2. 審査委員	主査：（兵庫教育大学教授） 鳥越 隆士 副主査：（上越教育大学教授） 我妻 敏博 委員：（鳴門教育大学教授） 田中 淳一 委員：（兵庫教育大学教授） 小林 小夜子 委員：（兵庫教育大学教授） 井澤 信三
3. 論文題目	聴覚障害児の教育支援のための聴能評価ツールの開発と活用に関する実践的研究
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻学校教育臨床連合講座 中瀬浩一 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成27年2月1日（日）14時0分～14時30分 場所：連合大学院大阪サテライト セミナー室（402室）</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>論文は以下に示す6章から構成されている。</p> <p>第1章 本研究の位置づけ</p> <p>第1節 研究の背景</p> <p>第2節 北米における小児を対象とした聴能の評価に関する先行研究</p> <p>第3節 日本における小児を対象とした聴能の評価に関する先行研究</p> <p>第4節 本研究の目的と構成</p> <p>第5節 用語の定義</p> <p>第2章 聴能マトリクステストの開発</p> <p>第1節 聴能マトリクステストの開発にあたって</p> <p>第2節 聴能マトリクステストの内容と実施方法</p> <p>第3章 聴能マトリクステストの有効性の検討－既存の聴能評価法との比較－</p> <p>第1節 目的</p>

第2節 方法

第3節 結果

第4節 考察

第4章 聾学校における補聴時の聴能評価（語音検査）の実施状況

第1節 目的

第2節 方法

第3節 結果

第4節 考察

第5章 聴能マトリクステストの事例検討

第1節 目的

第2節 対象

第3節 事例

第4節 考察

第6章 総合考察

第1節 研究のまとめ

第2節 教育支援のための聴能評価ツールとしての聴能マトリクステストの活用について

第3節 今後の課題

各章の概要は以下に示すとおりである。

第1章では、北米および日本における聴覚障害児者を対象に行われた聴能の評価に関する先行研究について整理し、本研究の背景と目的について論述した。

第2章では、開発した聴覚障害児の教育支援のための聴能評価ツール「聴能マトリクステスト」について、その開発経緯と実施の対象、方法などについて示した。

第3章では、聾学校幼稚部での本テストの教育実践上の活用の有効性を検討することを目的として、聴覚障害幼児50名147回の検査結果から、補聴時の閾値や年齢との関係、既存の語音検査との併用について検討した。その結果、補聴閾値や67式20単語了解度検査と本テストの素点に相関は認められなかった。語音聴取評価検査「CI2004（試案）」の幼児用オープンセット文検査と本テストの素点には高い相関が認められた。臨床場面においては、本テストが正答35/40以上では、聴取状況の細かい変化を把握しにくく、語音聴取評価検査「CI2004（試案）」の幼児用オープンセットの文聴取検査に移行した方が聴取状況をより細かく把握しやすいことがわかった。素点35/40を本テストから他の評価法への移行ラインとすることに妥当性があると考えられた。以上から、既存の語音検査と併用することで相互補完的に子どもの聴取能の評価が行えることが示唆され、本テストの有効性が認められた。

第4章では、聾学校での聴能評価（語音検査）実施状況を把握するために、聾学校幼稚部並びに小学部低学年における語音検査の実施状況について質問紙調査を行った。4～5歳児、小学部低学

年ともに、単音節の明瞭度検査と単語了解度検査を中心に実施していることが明らかとなった。また短文の聴取検査の実施率は高くなかった。聴能マトリクステストは4割程度の学校で知られていたが、活用しているのは20%程度だった。子どもの負担が少ない、実生活を反映した結果が得られる、「伸び」を評価できるなど肯定的な評価が得られたが、語表の追加、検査方法の改良など改善点もあげられた。この結果、本テストは、聴能発達を把握するツールの一つとしての教育現場での活用が期待できることが示唆された。

第5章では、聴覚障害幼児14名に継続的に実施した聴能マトリクステストの結果を事例的に分析した。その結果、聴取能の変容が「早期に良好な結果を示す児」、「少しずつ向上していく児」、「人工内耳装用児」、「聴取能の向上に課題を抱える児」の4つのタイプに分けられた。「少しずつ向上していく児」の中の“停滞期が続く児”に対して指導や支援の工夫が必要となってくること、「聴取能の向上に課題を抱える児」の中には聴覚以外の障害の可能性があること、教育開始や補聴開始の年齢に留意する必要がある、話しかけの方法など、支援の検討が必要なことなどが明らかになり、聴能マトリクステストの教育現場での活用の有効性が確認された。

第6章では、以上の研究をもとに、教育現場での聴能評価法と聴能マトリクステストの組み合わせによる聴能評価プロトコルを提案した。具体的には、67式20単語了解度検査の正答が15/20以上となった場合、聴能マトリクステストを併用し、聴能マトリクステストの正答が35/40以上となると、CI2004幼児用文検査など、オープンセットの文聴取検査に移行することを提案した。

2. 審査経過

(1) 研究目的と論文構成の整合性について

本研究は、日本の聾学校（聴覚特別支援学校）における聴能評価の実施状況や課題等を明らかにし、教育現場で実施可能で、なおかつ必要とされる聴能評価法「聴能マトリクステスト」を新たに開発し、その有効性と妥当性を検討することを目的とした。さらにその結果に基づいて、これまで日本ではなかった小児を対象とした聴能評価プロトコルの提案を試みた。日本及び欧米の先行研究を丹念に読み解き、その現状と課題から本研究の目的を導き出している。新たな評価法の開発とその妥当性の検討も論理的、実証的に行われており、また教育現場への適用に関して、丁寧な事例検討を行い、結果の吟味と考察も十分に行われている。以上、研究目的と論文構成に十分な整合性があると判断された。

(2) 学位論文としての独創性と発展性について

聴覚障害児教育は近年、新生児聴覚スクリーニングによる最早期の障害発見と療育開始、人工内耳やデジタル補聴器など医用機器の開発と普及により、大きく変化してきた。その中で純音による聴力検査だけでなく、低年齢児から実施可能な語音による聴能評価法の開発と整備が急務であった。本研究はその課題に教育現場の視点から取り組むものである。申請者による聴能マトリクステストの開発は独創的であり、その実践的、学術的価値は高い。また単一の検査法にとどまらず、他の語音検査（単語聴取検査、文了解度検査など）との関連を検討し、聴能評価プロトコルを提案したことは、本邦で初めてのオリジナルな試みであり、今後、実践的な検証の積み重ねによる研究の発展が期待できる。

(3) 学校教育や社会への貢献について

本申請者は長らく聾学校（聴覚特別支援学校）の聴能担当教員として経験と実践を積み重ね、教育現場に即した新たな問いとその解明を試みた。新たに開発された聴能マトリクステストや聴能評価プロトコルの提案等、日本の聴覚障害児教育に大きな貢献を行うことが期待できる。教育実践学の営みとして高く評価できよう。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 中瀬浩一 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。